

## 能登半島地震で災害医療に 取り組んだ岐阜薬科大教授

はやし  
林

ひでき  
秀樹さん(51)



能登半島地震の発生から1週間後、薬の調剤ができる移動薬局車両「モバイルファーマシー(MP)」で石川県珠洲市へ医薬品を届けた。現地で供給された医薬品の種類が乏しいといった課題は残ったが、「医療チームと一緒に避難所を回り、医師の診察後すぐに薬を出せた」とMPの存在感を発揮。8日間の活動期間で約250枚の処方箋に対応した。

愛知県一宮市出身。災害医療に

### この人

関わる原点は1995年の阪神淡路大震災だ。当時、名城大薬学部3年生。被災地の力になりたいと思ったが、何もできなかった。2010年のハイチ地震で、日本政府が国際緊急援助隊医療チームを派遣したとの記事を読み、15年前のわだかまりが呼び起こされた。すぐに隊員登録し、東日本大震災やトルコ・シリア地震などの被災地で薬剤師として活動してきた。

最適な薬の服用方法を考えたり、医師に代替薬を提案したりと役割は幅広い。ふだんは研究と教育に熱を入れ、災害医療は「部活動」と表現する。「医薬分業の進展や新薬ができることで、薬剤師の役割は増えている。病気で困っている人を助けるためにも、知識を磨かないと」

(中川耕平)